

■ 会員報告(サバティカル)：ケンブリッジの一年

奥田洋子

平成 29 年 4 月から 30 年 3 月まで、客員研究員 (Visiting Fellow)として英国ケンブリッジ大学のクレア・ホール(Clare Hall)に一年間留学しました。

クレア・ホールは、13 世紀初頭に創立されたケンブリッジ大学の中では、歴史の浅い、20 世紀半ばにできたカレッジで、専任の研究員のほかには、客員研究員が約 40 名と大学院生や博士号取得後の研究者が約 70 名いるだけの小規模な大学院大学です。大学の中央図書館へは歩いて 5 分、町の中心街へはキングス・カレッジの敷地を突っ切ると徒歩 15 分ほどの便利な場所にあります。また、西の方には美しい田園地帯が広がり、私が一年間滞在した West Court と呼ばれる戸建ての学生寮が並ぶ方庭(court)には、リスやウサギ、キジやシカまで出ました。あまり有名なカレッジではないために、観光客が訪れることもなく、静かな環境でした。

ケンブリッジ大学への留学は、ちょっとしたことから決まりました。日本コンラッド協会が関西で開催した第 2 回全国大会で、香港から参加した Evelyn Chan 先生の発表の司会を頼まれ、その後の雑談の中で私がサバティカルを取りたいと思っていると話したところ、ご自分が博士号を取られたときの指導教官を推薦して下さいました。初対面の方からの思いもよぬ申し出に少し驚きましたが、有り難く受けてすぐその先生にメールで連絡を取りました。その後、論文を数点送ったところ、思いがけず受け入れて下さいました。

さあ、その後が大変でした。一番大変だったのは、正式な願書に添付する“The Research Proposal”と“Personal Statement”の作成で、数カ月かかりました。その後、跡見学園女子大学に出した長期留学(サバティカル)の申請は、幸いと受理していただきましたが、もうひとつ苦労したのは、一年間の英国滞在のためのビザ申請書の入力でした。クレア・ホールからの手紙があったせいか、滞在許可はすぐ下りましたが、申請書の入力には数日かかりました。

留学が決まった時点で心積りをしていたことが三つありました。どれも「C」の頭文字で始まるものでした。

一つ目の「C」は言うまでもなく Conrad の「C」です。留学している間に、執筆中のコンラッドの作品中の情緒(emotions)を論じた本の章を最低三章、3本の論文として仕上げる。また、それらを口頭発表し、できれば学会誌に投稿する。

夏休みも旅行には行かず、資料に富みかつ居心地満点の中央図書館にこもって研究しました。そして実際には、4本半の論文を書き上げました。そのうち4本は留学中に、それぞれロンドン(7月)、フランス(9月)、クレア・ホール(10月)、ポーランド(11月)の各学会で口頭発表し、最後の1本は帰国後に完成して昨年6月に香港の学会で発表しました。現時点で1本がポーランドの学会誌に掲載され、あと2本が米・仏の学会誌に掲載される予定です。

滞在中には何人かのロンドンやケンブリッジ在住のコンラッド研究者の方々や、ケンブリッジ大学の先生方に論文を読んでコメントをいただき、この年齢になって生涯で一番すばらしい指導が受けられたと思います。自分の学生でもない私の論文を、時間も惜しまず読んで細かいコメントを下さった多くの先生方に——英文学研究者の方々だけではなく、アカデミック・ライティングの指導をして下さったケンブリッジ大学の先生にも——この場を借りて心からお礼申し上げます。

正直言って、一年間の滞在中には、投稿した論文がつかなく拒絶され、涙ぐんだこともありましたが、でもその論文は幸いと、多くの方々の助言を参考に書き直したところ、その後しばらくして受理されました。そのときいただいた「独創的かつ価値ある学問への貢献」という査読者の言葉は、微力ながら、「日本や東洋文化に通暁していることがその前提となる」英文学研究(高田康成『春秋』2013年6月号)を目指している私に、一回目とは全く違う涙を流させてくれ、今回の留学の最高の成果となりました。

次に、二つ目の「C」ですが、これはもちろん Cambridge の「C」です。ケンブリッジは、古い伝統を誇るカレッジからクレア・ホールのような新しいカレッジまで三十以上もの個性的なカレッジの集まった大学町です。カレッジのほかには、私がジェイン・オースティンの『エマ』とクリスマス・パントマイムの『ジャックと豆の木』を見に行った劇場やニュートンのリンゴの木で知られる植物園などがあります。市場のある町の中心部に

は、ヘファーズをはじめ大きな本屋が数件、それにスーパーはもちろんデパートもあります。寿司屋や日本料理店も数軒ありましたが、私はもっぱらクレア・ホールの食堂で食事し、たまに友だちを誘って日本料理のほか、美味しいイギリス料理やエスニック料理、パブ・ランチなどを食べに行きました。

ケンブリッジを紹介する際に、よく“town”（一般市民）と“gown”（大学の人々）とに分かれているように書かれていますが、私はむしろ、私がカレッジの一員だと分かったときの店員などの対応の仕方に、“town”と“gown”の間には——“own”という押韻が象徴しているように——何世紀もの間に培われた、切っても切れないつながりがあると感じました。

ケンブリッジのもうひとつの魅力は、四季の流れです。色とりどりの花が咲いてヒバリが鳴く春、サンザシやライラックの花が咲き誇る岸辺をパンティングのボート（平底で両端が方形の舟）が通り過ぎる夏、黄金色の麦畑の生け垣にブラックベリーが実る秋、そしてクリスマス・カードの中に迷い込んだような雪景色の後、スノウ・ドロップスの絨毯が現れる冬。今でも、早朝よく耳にした鳥たちの「暁の合唱」(dawn chorus)が聞こえて来るような気がします。

最後に三つめの「C」ですが、これは Choir（合唱）の「C」です。ケンブリッジは、“The City of Choir”と呼ばれるくらい合唱が盛んな町です。特に宗教音楽の合唱が盛んで、その気になればほとんど毎日どこかのカレッジのチャペルか音楽会場で合唱が聞けます。毎年クリスマス・イヴにラジオで世界中へ生中継されるキングス・カレッジのクリスマス・キャロルはよく知られていますし、宗教音楽の作曲家で指揮者としても名高いジョン・ラター(John Rutter, 1945-)もまたクレア・ホール誕生のきっかけとなったクレア・カレッジ(Clare College)の出身です。

私が日本で所属しているアマチュア合唱団の指揮者がジョン・ラターのファンであったこともあり、ケンブリッジではぜひ合唱団に入りたいと思っていました。ただ、クレア・ホールの合唱団はいわゆる「宗教音楽」を歌う合唱団ではなかったので、近くのトリニティー・カレッジ(Trinity College)の合唱団に入れてもらいました。トリニティー・カレッジにはいくつもの合唱団があり、私が入ったのは、ほとんど誰でも入れる一番素人

向けの合唱団でした。でも、16世紀からの伝統を誇る美しいトリニティー・カレッジのチャペルでの、“town”と“gown”の人々が混ざり合った毎週木曜日の夜の練習は、心ときめくものでした。そして、帰国する直前にメンデルスゾーンなどの宗教音楽を歌ったそこでの演奏会は、聴きに来て下さったクレア・ホールの友人たちの顔と共に、忘れがたい思い出です。

イギリスは、日差しが暖かいと思っていると、にわかには曇って通り雨が降るので、「一日の中に四季がある」と言われます。こうして過ごした長期留学は、一日一日の「四季」の流れの中では短かくても、一年間の四季の流れの中では長く、今でも私の研究姿勢に深い影響を及ぼし続けています。また、私を家族の一員のように受け入れて下さったクレア・ホールは、新しく手に入れた故郷のような気がしています。

(おくだ ようこ 跡見学園女子大学 教授)